

2013「東ティモール・フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」報告

NPO 法人ほっかいどうピーストレード 荒井久代



はじめに

2013年7月29日（月）から8月5日（月）、パルシック主催の「東ティモール・フェアトレードコーヒー生産者を訪ねる旅」が開催されました。ほっかいどうピーストレード（以下HPT）では、毎年メンバーが参加し、生産者との交流を図ってきました。

今年は、2月に越田清和事務局長が亡くなり、大黒柱を失ったという喪失感は否めませんが、彼のめざしたフェアトレードは、HPTの活動に生きています。そのことを現地に伝える意味でも、今回のツアー参加は不可欠であると感じていました。また、現地の関係者は、越田事務局長逝去直後に、首都ディリの教会でミサをあげてくれました。お礼を言いたいと思いましたが、今回はぜひ他の理事・会員に参加してもらいたかったのですが、多忙なため参加できず、また私が参加しました。

今年は羽田深夜便発（帰りは成田着）で、出発日は釧路から羽田、羽田からバリ島のデンパサール、デンパサールから東ティモールの首都ディリと3便をいっしょに乗り継ぐ強行軍ではありましたが、無駄がなく便利でした。集落の民泊は1泊（例年は2泊）でしたが、熱烈歓迎で濃縮した内容となりました。参加者は10名。東京からパルシックスタッフが1名、デンパサールでスリランカ駐在のパルシックスタッフ1名が同行しました。参加者のうち3名は、大ベテランの秋田県の焙煎コーヒー店主と愛媛県の焙煎コーヒー店主、福岡県のフェアトレードコーヒー会社（パルシックの生豆を今年から焙煎販売）の若い女性で、コーヒー関係者ならではの専門的な意見を随所で聞くことができました。

パルシック現地スタッフは、5度目参加の私が行ったことのない集落を候補にしてくれていましたが、最近の長雨で、道路が寸断して車で行けなくなり、2008年に立ち寄ったハトゥカデに行ってきました。この長雨で野菜などの農作物も被害を受け、コーヒーは実が落ちたり、乾燥も不十分な状態で、さらに裏作が重なって収穫量は今年の半分以下と予測されていました。「空腹の年になる」との危惧も聞かれ、大変心配な状況です。

ここでは、日程に添ってツアーの概要と感想を報告します。

首都ディリの近代化

7月30日(火)、デンパサールから2時間でメルパチ機は首都ディリに到着しました。雨が続けていると聞いていましたが、晴天と熱風に出迎えられました。入国手続きに1時間以上手間取っている間に、もう一機が到着。インドネシアの小さな航空会社がデンパサール・ディリ便を就航したそうです。その便かもしれません。

空港では、パルシック東ティモール事務所の大坂智美さんが笑顔で出迎えてくれました。今年は、プロジェクトマネージャーの伊藤淳子さん(以下淳子さん)が第三子(男児)出産後の産休中で、大坂さんがツアーリーダーです。大坂さんのティトゥン語はますます上達し、活躍されていることがわかりました。今年も3台の車で移動することになりました。

空港の玄関前には大きな立て看板が10数枚立っています。去年はホテルの看板など3枚程度でしたが、今年は携帯電話やUSBメモリーなどの企業の宣伝看板が増えていました。道路は新しい車と黄色いタクシー、バイクなどで混雑しています。国連の車は下取りされたらしく、UNマークは白く塗り替えて使われていました。大型ショッピングモール・ティモールプラザの駐車場も車でいっぱいでした

海岸沿いの遊歩道や遊具が整備されたラルゴ・デ・レシデ公園(2012年建設)は、一面が屋根付きのWi-Fiスポットになっており、個室様に区切られたコーナーで、若者が持参のパソコンでネットをしていました。人々は夕方の散歩を楽しんでいます。この浜辺で、越田事務局長のミサの花輪が海に投げられたそうです。

石油景気と消費拡大の恩恵を受けるディリですが、油田は数年で枯渇し、地方との格差も広がっていると聞いています。どうなるのかと心配になります。

オリエンテーション～HPTの1000ドルの寄付を託す

今年のオリエンテーションは、往路での疲れが心配され、パルシック東ティモール事務所ではなく、ホテルで行われました。淳子さんも短時間でしたが立ち寄ってくれました。母乳での子育てに奮闘中とのことでしたが、お元気そうでした。



ラルゴ・デ・レシデ公園



若者が集うWi-Fiスポット

なお、現在、パルシックスタッフは、日本人は淳子さん、大坂さんの他、宮田悠史さん、高橋茂人さん。マウベシの現地スタッフは、女性2名、男性4名とのこと。

2007年以來続けている、HPTからココマウ（マウベシ郡コーヒー生産者協同組合）への寄付・北海道米の収益金他1000ドルは、大坂さんに託しました。使い方については、後日、再編されたココマウに改めて寄付の趣旨を説明して検討し、報告してくれることになりました。大坂さん、淳子さんのお話の概要は次の通りです。

■ココマウについて（大坂智美さん）

パルシックでは2002年からコーヒー生産者支援を始め、2004年にはココマウを結成した。2011年2月に組合役員の不正が発覚し、その年に個人加工で納入する形に再編した。個人加工のメリットとして、頑張れば成果が見えるので、いいコーヒーができたことがあげられる。2012年には役員を一新した。今年目標はグループの強化を図ること。2013年5月現在、5村17グループ、521世帯が加入している。

■東ティモールでのパルシックの活動（伊藤淳子さん）

1999年10月、パルク（現パルシック）は東ティモールの緊急支援に入り、学校再建事業などに着手した。2002年からコーヒー生産者支援を行い、日本のフェアトレード市場につなげている。人々は、ポルトガル時代から自分で決めて行動することをさせてもらえなかったため、ココマウの組合活動も管理や運営が難しく、紆余曲折もあったが、失敗で学び鍛えられていくのだと思う。

現在は、次の10年の展望をもとに活動を始めたところである。コーヒー以外の収入の多様化をめざし、女性たちは身近な作物の加工を始めている。今回訪問するハトゥカデでは、女性グループが蜂蜜やハーブティーを作っている。また、環境保全事業（森林保全型農業の支援）も始めた。薪の使用量削減のためのロケットストーブ（カマド）の導入、植林、果樹の苗の植え付け、家畜の飼い方の工夫などを行っている。豚の糞をバイオガスにすることも計画されており、課題もあるが、実現してほしいと思っている。

独立抵抗博物館の見学

7月30日午後4時すぎ、5時に閉館するという市内の独立抵抗博物館を見学しました。去年は庭の工事のため停電していて見学できなかった所です。聡明そうな女性スタッフから、下記のような説明がありました。

「ポルトガル時代は裁判所だった所で、1999年、インドネシア軍に建物は破壊された。2002年の独立後、修復



大坂さんにココマウへの寄付を託す



独立抵抗博物館・館内は撮影禁止

が始まり、インドネシア時代から独立までの歴史資料館とすることが決まり、2005年には本格的なものとする検討が行われ、2012年5月20日の独立10周年のとき現在の形になった。博物館の目的は、独立闘争時代のファリンテル（東ティモール民族解放軍：フレテリンの軍事組織）の活動記録を残すことと、後世の国内外の人々に歴史を伝えること。資料展示や歴史の説明など3つのスペースがある。」

歴史コーナーでは、日本軍の侵略についても、10数行ではあるけれど記述がありました。また、1991年のサンタクルス事件の実録、外国人ジャーナリストが撮影した映像が放映されていました。この映像で、全世界にインドネシア軍による虐殺が知られることになりましたが、人々が次々と無差別発砲で殺されていく、悲惨で生々しい事件の記録です。

ここには、1時間足らずでは、とうてい見切れない資料の数々が展示されています。新しいコーナーも改築中でしたし、言葉の壁（ティトゥン語、ポルトガル語、英語展示）さえなければ1日割いて、もう一度訪問したい所でした。

地方女性の活動を支援する NGO 「HAFOTI」 訪問

7月31日（水）、直前まで長雨だったのが信じられないくらいの快晴です。海辺のホテルの朝食は卵料理まで注文でき（ディリのホテルで初体験）、野菜入のオムレツは美味でした。

午前中はディリの HAFOTI を訪問。庭のある建物で、屋内には商品の展示販売コーナーも設けられていました。代表のドーティア・ケースさんから次のような説明がありました。

「ハホッティは地方の女性グループの活動を支援するために2002年に設立された非営利団体で、ドイツやニュージーランドの NGO の支援で運営している。アイレウ、ボボナロ、バウカウ、リキサ、マヌファヒ（サメ）、オエクシ、ヴィケケの7県の14グループ・157世帯と活動している。スタッフはディリに4人、7県に各1人いる。

マーケティング、トレーニング、マイクロファイナンス（小口融資）の3つのプログラムを実施している。バナナチップスやキャッサバチップス、ココナッツオイルなどの作り方のトレーニングや機材の提供をしている。女性たちから毎月納品された商品は、ハホッティでかわいいパッケージングを行い、市場につなげている。市場から回収した売り上げは女性グループに渡している。

マイクロファイナンスは、地方の小売店やキオスク、野菜やパン販売を行っている女性に、100ドルから300ドルを貸し付けている。モニタリングスタッフを現地に派遣し、状



HAFOTI の入口



代表のドーティアさん（中央）



女性グループの商品

況調査を行い、ローンの返済につなげている。

「ここのお店は 2011 年 2 月にオープンした。ハホッティメンバー以外のマウベシのハーブティーや蜂蜜も販売するなど、広く女性の事業を支援している。」

主な Q&A は次の通りです。

Q：なぜ女性グループ支援にしぼるのか？その背景は？

A：会の名称 HAFOTI には女性の傘になるという意味がある。女性の活動の支援は夫の支援も必要である。

Q：金利と成功率は？

A：金利は 6 カ月で 6%、12 か月で 11%、18 か月で 16%。高齢のメンバーで、野菜販売がうまくいかなかった例も 1 例あるが、他はうまくいっている。オエクシでは政府と共同で活動していることもあり、いい結果をあげ、車まで買った。地方の女性たちはみんな、子どもを学校へ行かせたくて、少ない利益でも頑張っている。アイレウでは子どもをインドネシアの大学に行かせた例もある。東ティモールでは、男性にお金を渡すとお酒などに使ってしまうことが多い。

Q：買い手は？

A：今はティモール人を対象にしようとしている。

A（大坂）：国連撤退後、外国人が少なくなり、商品が売れなくなった。

Q：ティモール人に売るための工夫は？

A：パッケージと品質は変えずに、値段を下げた。ココナッツオイルは 6 ドルから 5 ドル、チップスは 1 ドル 40 セントから 1 ドルにした。

Q：輸出はしているのか？

A：今のところ輸出はしていないが、政府観光省が輸出を決め、韓国への輸出を予定している。

Q：東ティモールは封建的などころもあると思うが、女性全般の状況は？

A：基本的には、女性は家の中の仕事をする立場にあると思われている。地方で仕事をしている女性は、75 年、99 年に夫を殺された人が多い。地方での活動は市場が小さくてお金を得るのは難しい。市場の大きいディリで売るのがいい。

Q：夫の理解が大切であると話されていたが、どんなアドバイスをしているのか？

A：マイクロクレジットで契約するときは、夫の賛同が必要になる。男性のスタッフが夫



かわいい小物やアクセサリ



マウベシ産ハーブティー



最近開店した空港店

のいる前で契約の説明をしている。夫の理解が得られない場合は、契約できない。

Q：契約時のルールでは、何を大切にしているか？

A：ティモールではお金を返すのはなかなか難しいこと。規定が弱くてはおざなりになるので、今年改訂してより強いものにした。契約には3、4ページにわたる多くの規則がある。審査があり、きちんとした考えがあれば貸し付ける。夫の理解もなく、考えがあいまいでは、審査に通らず、断ることもある。

Q：「こげつき」はあるのか？

A：3か月待っても返せない場合は差し押さえる契約になっているが、これまで、そのような「こげつき」の例はない。モニタリングと声掛けが効果を上げている。

Q：トレーニングとは、作り方の指導をしているのか、地域にもともとあるものなのか？

A：たとえばタイスの織物では、女性たちは作り方をわかっているが、市場がどのような品質を求めているのか、色落ちしないなどの市場のニーズを伝えている。バナナチップスでは品質の良い地域のメンバーを連れて行きトレーニングしてもらった。

Q：どういうところで苦勞されているか？

A：モニタリングを毎月やらなければ返済できないので、毎月実施していること。

Q：どんなところで商品を購入できるのか？

A：ここのお店以外では、大型スーパーマーケット、ホテル、ディリに1店だけある24時間営業のコンビニなどで販売している。1村1品運動も推奨されており、お店でコーナーを設けて販売している。空港店も最近オープンした。講義終了後、ツアー参加者は、東ティモールで頑張っている女性たちの商品、ハーブティー、手作り石鹸、タイスの織物などを、たくさん購入していました。

暑い（マナス）ディリから寒い（マリリン）マウベシへ

7月31日の昼食は、ライブハウスにもなる都会的な新装開店のレストランへ。壁にはビールツルの写真が貼られ、ドラムやアンプが並んでいました。

続いて、ハリラン市場へ民泊に持参する食糧の買い出しに行きました。昨晚、ホテルで飲んだビンタンビールが1瓶（小瓶）2ドル50セントで、ホテル値段とはいえ高いのはびっくりしましたが、レストランのビール値段はどこでも日本並みでした。市場でも野



何でも売っているハリラン市場



コーヒーの粉の量り売り



カゴ屋・左はビンロウジの種子

菜以外は少しずつ値上がりし、ボテ（コーヒー収穫に使う籠）が6年前は1個0.5ドルだったのが1個2ドル、卵も10個2ドルだったのが6個2ドルでした。（東ティモールの通貨は米ドル、1ドル未満は独自のセンタゴです。）

その後、でこぼこのある急カーブの続く道をいっきに上り、アイレウの町で途中休憩し、4時間近くかかりマウベシへ。標高が高くなるにつれて涼しくなり、マウベシでは夕方はダウンが必要なくらい冷え込みます。ホテル・パウサダではパルシックスタッフの高橋茂人さんが待っていました。高橋さんは長年東ティモールの支援に関り、ティトゥン語も堪能な方で、2008年にツアーのガイドをしていただきました。「今回も淳子さんの産休要員です。パルシックの仕事を手伝いながら、東ティモールやインドネシアの歴史を調べている」などと話されていました。このホテルの一室を借りて住んでいました。

夕食は、いつものレストラン・サラではなく、新しくできたレストラン・アモラという所でした。参加者とパルシックスタッフ、アルバイト運転手さんで自己紹介を行いました。マウベシでは、郊外にも新しいレストランができて流行っているそうです。

マウベシの町からハトゥカデ集落へ

8月1日（木）、昨夜は満天の星の下をホテルに帰りましたが、朝は、山々の向こうから朝日が昇ってくるのが見えます。庭にはバラや花々が美しく咲いています。赤黄黒のグラデーションを見せるコスモスのような花「ガイラルディア」を、国旗と同じ色の花なので、国花にしようという話もあるそうです。10月にはここで花フェスタが行われるそうで、美しいことでしょう。



国旗の色のガイラルディア

朝食後マウベシの市場へ。市場の中は去年と変わらない様子でしたが、道をはさんだ反対側にはビーチパラソルを立てた野菜販売所がいくつもでき、その隣の広場は古着の青空フリーマーケット（？）が開かれていました。マウベシでは見たことがないほどの人出でにぎわっていました。パルシックのマウベシ事務所に立ち寄ると、生産者がパーチメント（脱肉後の白豆）の納入に来ていました。行ったことのある集落の方々と握手で再会の挨拶をしました。パルシック事務所の倉庫には20キロ入り袋が積み上げられていますが、ま



マウベシ市場の新コーナー



マウベシ事務所の倉庫



道路工事中の分岐までの道

だ量は多くはありません。今年は教会の倉庫が行事のため借りられなかったそうです。

今年はパーチメントをフェアトレード価格（市場価格に 1 kgあたり 60 セント上乘せ）1 kg 2.15 ドルで購入。去年は A ランク（最高級品）、B ランク（次点品）を設定しましたが、B ランクの購入先を探すのが大変なため、今年は A ランクのみ購入しているとか。去年は A ランクが 1 kg 2.40 ドルでしたので、コーヒー価格が値下がりしているようです。

その後、3 台の車とパルシク車 1 台でハトゥカデへ向かいました。マウベシは去年から 24 時間電気が供給されるようになりましたが、集落には電気もガスも水道もありません。

ルスラウ方面への分岐までの道は、道路工事用の車両が何台も止まっていて、道路の幅が広くなり整備されつつありました。長雨の修復工事には大がかりで、国のインフラ整備の一環ではないかと推測されます。分岐を過ぎてからはいつもの難所続きの道でした。

正式な歓迎式で出迎えてくれたハトゥカデ集落

1 時間半でハトゥカデ到着。広場にはダンスパーティー会場が作られ、大勢の人の真ん中で美しい娘さんが 2 人、正装でタイスの織物を抱えて待っていました。パルシク現地スタッフのネルソンさんがグループ代表と打ち合わせをしていました。彼には集落の人々が信頼を寄せているようです。ネルソンさんは、「親戚の人のことで忙しく、隣県の実家から直接バイクで来て、明日はまた戻らなければならない」と話していました。家族はとても大切なのです。私は、息子といわれている仲良しの彼との再会を喜びましたが、5 回目の参加ともなると「来るのが当然」という雰囲気になってきました。

ハトゥカデは 2007 年からココマウに加入しています。私は 2008 年にルムルリの帰りに立ち寄りしましたが、チームワークのよい元気な集落で、加工技術も非常にグレードが高く、干してあるパーチメントはお菓子のようないい香りがしていました。現在、ココマウに 35 世帯が加入しています。ここでの加工実習は期待できます。

歓迎の儀式では、まず、娘さんたちがタイスの織物を首にかけてくれます。ツアー参加者の名簿が準備されていて、一人ひとり名前が呼ばれたのには驚きました。続いてママ（ビンロウジの種子を石灰と一緒にかむもの）、タバコ（タバコの葉をトウモロコシの皮で巻く）、コーヒーのもてなしを受けました。

昼食後、日本人が養蜂のために試作した巣箱を見に行きました。ハトゥカデでは、女性たちが蜂蜜を瓶詰して商品化していますが、野生では集めるのも大変だからです。しかし



正装の娘さんと大勢の出迎え



歓迎のタイスの織物を肩へ



初体験のママ作り

巣箱には紐がかけられ、蜂はいませんでした。蜂蜜を集めたけれど、子どもたちがやってきて、手を突っ込んで、みんななめてしまうのだそうです。熊のプーさんみたいな思わぬ「敵」に、頓挫させられていました。

生産者との交流会

交流会にはグループ代表のジョアオさんのほか、副代表のレイスさん、副集落長のオーランドさん、長老らしき人、隣の集落ルムルリからも集落長など大勢の人が来ていました。

代表と集落の方からコーヒーや家族構成など、次のようなお話がありました。

「2012年、集落から5トンのパーチメントを出荷できたが、今年は4トン位と予測されている。Aランクのパーチメントを出荷し、商品化されないものを自家用にしている。自宅ではパーチメントの皮を臼と杵で脱穀し、生豆をフライパンで煎り、再び臼でつぶして粉にして、毎朝飲んでいる。豆類は、赤と白い豆は高く売れる。大豆は12キロで15ドルになるが、今年は長雨で腐ってしまった。」

「ここには89世帯495人が暮らしている(2010年実施の全国統計では64世帯でしたので、かなり増えたようです)。結婚相手は親が決める。家族は、子どもは8人から10人で、祖父母と一緒に暮らしている。収穫期は朝5時に起きたらすぐに畑に行く。すべてがコーヒー農家で、その他は畑の作物を売りにいったりする。週2回、マウベシにお米などの買い物に徒歩で行く。夜1時にハトゥカデを出ると朝7時に着く。マウベシを午後2時に出て6時に戻る。ディリへは年1回か2回、物を売りに行く。」

「病人が出るとみんなで担いでマウベシへ行ったが、2011年から村長に連絡すれば救急車が来てくれるようになった。巡回の診療所として月に1回か2回、医者がかかる。出産は自宅の台所です。年配の女性や助産専門の女性が手伝う。4日も5日も生まれないときはマウベシへ連れて行くが、難産に効く伝統的な薬もある。」

ルムルリの集落長と代表からは、2011年のコカマウ役員の不正事件後、ルムルリとハトゥカデで個人の独立事業として頑張ってきたこと、フェアトレード事業で水を引く事業を始めようとしていることなどのお話がありました。

質疑応答の後は、生産者からツアー参加者への質問時間です。家族や年齢などについて聞かれると思っていましたが、「コーヒーの品質向上のために畑の道具がほしい」「パーチ



代表のジョアオさん(右から2人目)



閉鎖中の蜜蜂の巣箱



新しく作られた薪小屋

メントの干し台が足りない」「マウベシから遠いのでコミュニティ用のバイクがほしい」などの「要望」が聞かれました。大坂さんは「質問の主旨が違って受け取られたのではないかと再質問してくれたますが、「ビニールシート」との回答だったそうです。

NGOが加工機材の貸付や提供をしてきたことが誤解を呼んだのでしょうか。越田事務局長の講義ではありませんが、フェアトレードに関わる日本人は「やや貧乏な人々の助け合い」精神の持ち主です。私たちの後ろに、豊かな日本が見えるのでしょうか。「開発援助など、外からの関わりは何らかの影響を与えてしまうと痛感している」という国連勤務の女性の言葉を思い出します。外国人が入ることの難しさを考えさせられた一幕でした。

子どもたちとの歌合戦とダンスパーティー

交流会終了後は、男性たちはサッカーを始めました。俊足の男の子もボール拾いをしています。これまで、札幌市内の高校やコンサドーレから寄付してもらったボールを持参していましたが、今年はボールを集める時間がないので釧路で新品を買い、「HOKKAIDO PEACE TRADE」と書いてグループ代表に贈呈しました。サッカーは暗くなるまで続いていました。娯楽の少ないところなので、一番喜ばれるおみやげなのです。

女の子たちと私は「TO`OS NA`IN」「Masi Olarinda」を仲良く合唱。この集落でもラ行の巻き舌がうけました。夕方になると子どもたちが大勢集まってきました。私は少林寺拳法歴のあるツアーの男性と組んで演武を披露し、子どもたちに突きや蹴りを教えました。みんな恥ずかしがりやですが、実習したのは女の子ばかりなのには驚きです。歓声が上がり、大盛り上がりです。ツアーの若者は相撲を披露し、受けていました。

そのうち、東ティモール子どもチーム対ツアー参加者の歌合戦が始まりました。子どもチームはますます人数が増えてツアーチームのほうに迫ってきます。東ティモールの歌と日本の歌が続いた後は、「幸せなら手をたたこう」です。この歌はティトゥン語(?)の歌詞にもなっていて、子どもチーム(ティトゥン語?)とツアーチーム(日本語)が交互に歌うので、エンドレス状態になりました。

夕食後は、ダンスパーティー開始です。代表から子どもの解散時間が告げられました。ここの子どもたちは大人の言うことを、蜂蜜以外は(笑い)よく守るのに感心しました。

ダンスは代表の指名で最初のカップルが決まりました。私の相手は長老ではないかとの



子ども大合唱団



夜通しのダンスパーティー



ステップも一人前のダンサー

予測に反し、若者でした。1曲終わると次々と誘いの男性が来て、座る間もなく、これまたエンドレスの様相です。ツアーの面々は12時ころには退散しましたが、ダンスパーティーは夜通し続きました。3時ころから、プレイヤーを操作する人がいないのか同じ曲ばかり流れていましたが、ダンスと歓声は続いていました。6時ころには若者が返り、変わって早起きの女性や子どもたちが踊っていました。ダンスパーティー会場真上に位置する民家をツアーの女性たちに開放してもらいましたが、音が激しくて一睡もできませんでした(苦笑)。

朝、外に出てみると、小さな男の子が左手を胸にあてて右手を横に広げ、ペアで踊るステップを踏んで一人ダンスを披露しています。昨晚見ていたのでしょうか。「回って」というと一回転してくれます。かわいくて笑ってしまいました。

朝のコーヒーができるまで

8月2日(金)の夜明け直後、一人で丘の上まで散歩しました。山々と山間に点在する民家が見渡せる大パノラマです。

帰りに頭の上に大きなボテを載せて歩く4、5人の若者たちとすれ違いました。籠の中を見せてもらうとマウベシのホテルの朝食で食べたおいしいパンが満載です。マウベシの市場でも売っていました。この近くでもパンを作っていると聞きましたし、彼らも「マウベシ」と言っていたので、これから売りに行くのでしょうか。若者の足とはいえ、何時に着くのでしょうか。

戻ってみると、母屋の前で女性たちが杵と臼でパーチメントを脱穀し生豆にしています。家の中は2つの四角いブロック様の石に金の棒を渡した新種のカマドに中華鍋を乗せて、焚火の上で生豆を焙煎中でした。かなり深煎りにしてから脇にずらし余熱で加熱するベテランの技です。その隣では新型カマドのロケットストーブの上でお湯がわいています。

以前に訪問した集落では、大きな石を三つ置ただけのカマドが使われ、家の中に煙が充満し、目が痛くなりました。それに比べて煙はかなり少なくなりました。薪小屋を作って薪を乾燥させていることも効果を上げているようです。焙煎したコーヒーは再び外の杵と臼で粉にし、沸騰したお湯の中に入れ、茶こしでこして、コーヒーの出来上がりです。

朝食は茹でたキャッサバ(いも)と香り高いコーヒーです。カフェ・マナス・コブ・イーダ(一杯の熱いコーヒー)を飲んで、いよいよ収穫です。



人力のコーヒーミル



自家用コーヒーの焙煎



熱効率のいいロケットストーブ

コーヒーの収穫と加工実習

ネルソンさんから収穫～加工までを写真で示したパルシックのポスターで、作業の説明がありました。「簡単な作業だが、作業工程をわかってもらうのに2年から4年かかる」「今年はとても豆が少ない」「ここは湿気の多い地域なので乾燥は気候に左右され、天日干しは7日で済む場合もあるが、2、3週間かかることもある」そうです。

主なQ&Aは次の通りです。

Q：なぜ、作業がわかるまで時間がかかるのか？

A：メンバーの方々が学校へ行っていないので、写真で説明しなければならないことや、ポルトガル時代はチェリー（脱肉していない赤い実）のまま販売していたので、農家にとっては新しい作業であることなど。

Q：今年是不作が心配されるが、生豆の出荷はどのくらいの予想か？

A：2011年も不作でパルシックから出荷した生豆は9トン、去年はこれまでにない豊作で90トンと、年により変わる。今年はその中間と予測されている。価格も下がっている。

Q：長雨の影響は？

A：長雨で実が落ちる。乾燥もできない。乾燥が不十分だと黒くなり、市場が買ってくれない。収穫の時期を遅らせることはできない。大変な年になるだろう。

Q：カップテストはしているのか？

A：カップテストのトレーニングを受けた自分がしている。自分がよいと思うもの、雑味のないものなどを選んでいく。

終了後は、近くの畑へ行きました。コーヒーの木はシェードツリー（日陰樹・モクマオ



作業を説明するネルソンさん



日陰樹（上）とコーヒーの木



剪定されている若木



赤く熟した実だけを手摘み



シートに広げて選別



浮き豆も除く

ウ) に守られています。真っ赤に熟した実だけを収穫しました。摘んでいい実か迷ったら集落の人に聞きます。いいかなと思ってもかなり厳しく選別されます。若い木の方が多く実をつけているようです。1時間ほどでしたので収穫はボテの4分の1くらいでした。

次に代表の家を訪問しました。ヤシやバナナの葉のような草葺き屋根の伝統的な家です。子どもが12人生まれ、2人亡くなり、10人いるそうです。庭にはきれいなパーチメントが干されています。代表の畑はよく整備され、若い木は地上から2メートル半くらいのところで剪定され、枝が横に広がるようになっています。代表は「この木は(植えて)3年、それは4年目」と、すべての木について把握しています。まずまずの実の付き方ですが、昨年は大豊作で、枝に実がびっしりと付き、重さで垂れ下がっていたそうです。

手作りの脱肉機も見学しました。私も初見です。ポリタンを挿入口にし、途中に縦に付いている円盤のような金物には、ぼこぼここと小さな打ち出しがいくつもあり、滑車を廻して、ここにチェリーを通すと果肉が除かれます。力のいる仕事です。少しゆっくり加減の方がきれいに脱肉されるようです。代表の家ではすべてこれで脱肉しているそうです。

急坂を登って加工場へ帰ります。ネルソンさんの足が非常に速いので、みんなはついて行くのが大変でした。収穫したチェリーは、ビニールシートに広げて選別します。ここでも非常に厳しいチェックが入り、少しだけ青い実も虫食いなどの実も除かれます。こういういねいな選別作業があるので、いいパートメントを出荷しているのです。

選別後のチェリーは水をはったバケツに入れ、浮き豆は除きます。金属製の手動の脱肉機で果肉を除くと、バケツにパーチメントが落ちてきます。これまで行った集落ではパーチメントは水を入れて発酵させますが、ここでは水をはらずにこのまま24時間置きます。「他は気温が低いので水をはる」との補足説明がありました。コーヒー加工では、この発酵が大切だと聞いていましたが、気候により方法が異なることは初めて知りました。



果肉を除去しパートメントに～24時間置き発酵させる～よく洗い2週間ほど天日干し



代表のご自宅～代表手作りの果肉除去機～滑車を廻すとパーチメントが出てくる

ツアーの実習は 1 日だけでしたので、ここで終了。その後は、パーチメントを水でよく洗い、ぬめりと発酵臭を除き、天日干しされます。干している間も、一粒一粒選別されます。水分含有量が 10~11% になると出荷できます。ここまでが生産者の仕事です。

昼食には、トウモロコシと豆などを煮たバタールダンという伝統的なおかゆのようなスープも出してくれました。キャッサバも入っているようです。味は付いていませんが、豆に甘さがあって、すごく美味です。1泊2日の間中、女性たちが料理を提供してくれました。お別れの会では、私たちはボテにメッセージを書き、贈呈することになりました。大坂さんからおいしい料理を提供してくれた女性たちにあげたいと集落の役員に話したところ、長老などにしてほしいと言われたそうです。大坂さんはめげずに説得を続け、女性たちに贈呈することができました。男性社会の小さな快挙です。女性たちは涙ぐんで受け取ってくれました。集落からは焙煎コーヒー店と HPT にパーチメントをいただきました。パルシックスタッフの記念写真には私も呼ばれて収まり、不自然感なしです。

大勢の集落の人たちが私たちの車を見送ってくれました。少し走ると、先回りした足の速い女性や子どもたちが手を振っています。東ティモールの人々の、このやさしさは言葉にしがたいものがあります。また来たくなる国なのです。

加工場見学とマリートさんのサンタクルス事件のお話

8月3日午後、途中でバイクとトラックの交通事故と遭遇するなどして、4時間以上かかりディリに戻り、コーヒー加工場の PT ナクロマンを見学しました。パルシックスが、パーチメントの最終加工（薄皮をはがして生豆にする）を頼んでいる所です。大きな機械の上からパーチメントを入れると、薄皮がはがれ、生豆（グリーンビーンズ）が落ちてきます。下で受ける台は左右に揺れ、台の穴の目の大きさにふるいにかけて、大きさで A、B、C ランクに選抜されて出てきます。一社の仕事が終わると隅々まできれいにし、次の豆が混じらないようにしているそうです。ココマウの有機認証の調査は、ここにも入ります。

続いて、サンタクルス墓地の見学です。パルシックスタッフのマリートさんが待っていました。2000年からパルシックスに勤務し、越田事務局長と一緒に働いた時期もあるそうです。毎年、やさしい笑顔で私たちを歓迎してくれますが、サンタクルス墓地の近くに自宅があり、事件を目撃していたことは初めて知りました。



墓地で話すマリートさん

サンタクルス事件は、1991年11月12日に起こったインドネシア軍による東ティモール市民大量虐殺事件です。その2週間前に、ディリの教会でインドネシア軍の襲撃で殺害された独立派の青年セバスチアン・ゴメスさんの葬列は、次第に独立を叫ぶデモと化し、墓地に集まった人々にインドネシア軍が無差別発砲し、大勢の犠牲者が出ました。

マリートさんのお話は次の通りです。

「当日はセバスチアンさんの葬儀があることは聞いていた。朝7時半ころに家を出ると、ファリンテルの旗が見え、外国人ジャーナリストの姿もあった。銃を肩にかけたインドネシア軍兵の数が増えていた。サッカー場まで来た時、銃声が聞こえ、人が走ってきて『ミサの行列が墓地に着いた時、軍が発砲した』と聞いた。知人が殺されたかもしれないと思った。自分の家にもけが人が逃げ込んだが、家族が衣類を着替えさせインドネシア軍から守った。墓地は2日間閉鎖され、その間に軍は死体を片づけ血を洗ったと言われている。死んだ人もまだ生きていた人もディリの西側に埋められたと言われているが、場所はわからない。軍兵が暴行しているのも見え、至る所に軍兵がいた。ジャーナリストの撮影したビデオは墓地の中から撮ったもので、軍は墓地の外から発砲していた。」

私たちはツアー初日に独立抵抗博物館でその映像を見ていたので、マリートさんのお話は、心にしみわたります。本当に、独立までには、長く厳しい道のりを要したのです。

おわりに

8月4日(日)、買い物日和。タイス市場やティモールプラザでお土産を買いました。愛媛県の焙煎コーヒー店さんは、従業員用に東ティモール国旗模様のTシャツを10枚以上も買っていました。東ティモール・デイを設けてコーヒーを売るのだそうです。いいですね。

ティモールプラザは、超近代的な建物で、マウベシのお母さんたちは「怖くて一人では入れない」というので、大坂さんが同伴しているそうです。地下1階のスーパーマーケットには、1村1品運動のコーナーが設けられており、マウベシのハーブティーもたくさん並んでいました。私も参加者も、ここでたくさんのお土産を買いました。

ツアーは大坂さんを始めとするパルシックスタッフの細やかな気配りに助けられ、生産者の歓迎も交流もすばらしいものでした。参加者の皆さんは、大変感動した、勉強になったと話されていました。それぞれの場でフェアトレードコーヒーを広めてくれるでしょう。

マウベシから戻るとディリは別世界の様です。越田事務局長の講義で「貧しいアジアと豊かな日本という構造・格差が縮まるなかで、『やや貧乏な人々』が連帯することではなにか」と話されていたことが、現実味を帯びて思い出されます。

HPTでは、これからもマウベシのコーヒー生産者との絆、地域と地域の連帯を深めたいと思いつきながら、帰国の途につきました。



NPO 法人 ほっかいどうピーストレード
〒003-0803 札幌市白石区菊水3条1丁目6-12
TEL 070-5619-3222 FAX 011-812-4377
hokkaidopeacetrade@gmail.com
<http://www13.atwiki.jp/hptrade/>
2013年9月 写真・編集：荒井久代